

II 特別シリーズ II

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

(番外編)

インド若手研究者、行政官等を
招へいし「日印大学交流会」開催

インド工科大学(IIT)、インド科学教育研究大学(IISER)、科学技術省(MOST)、人的資源開発省(MHRD)から30名が来日

科学技術振興機構(JST)は「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」(さくらサイエンスプラン・SSP)事業の一環で、昨年度に続き今年度もインドから若手研究者、行政官の招聘を実施した。今回の招聘事業の特徴は、インドの工科系研究大学群であるIIT(全23校)のトップ15校と、基礎科学の教育研究に重点を置くIISER(全7校)の4校というインド最高峰の理工系大学19校に加えて、インド政府の科学技術推進を管轄するMOSTに加えて、大学を含む教育・人材育成を管轄するMHRDの関係者も併せて招聘し、まさに、インドの科学技術推進を担う中核組織を網羅する特別な意味を持つ招聘となった。

IITは世界の教育関係者の間でもよく知られているが、それと同様にトップ理系人材を集め、インド国家重要機関にも指定されているIISERは、21世紀に入ってから設立された新しい国立理系大学群であり、その潜在力は高い。今回、インド最高峰の研究大学であるIITとIISERの19校の関係者がまとまって訪日するというのは、おそらく日本では初のこと、日印間大学交流の歴史において画期的な意味を持つものと考えられる。

○優れたインド人材と日本の若者との交流



産総研でTIAの説明を受ける一行



産総研サイエンスプラザを見学する一行

プログラム	
1日目	到着 オリエンテーション
2日目	東京大学、東京工業大学訪問
3日目	筑波大学、産業技術総合研究所訪問
4日目	都内見学(お台場) 日印大学交流会(JST)
5日目	理化学研究所革新知能統合センター訪問 都内見学
6日目	日本電子訪問 成果報告会(JST)
7日目	離日

今回の「さくらサイエンスプラン」によるインドからの招聘の最大の目的は、日印の大学が相互によりよく知り合い、本格的な日印大学間の交流が拡大することを目指すものである。インドには800を超える大学があり、現在も増え続けている。また、インドには日本でも知られたIIT以外にも優れた国立、州立、私立の大学が多くあるが、その多くは日本での知名度が低い。

インドの多くのトップ大学は既に欧米諸国の大学とは活発に提携・連携しているが、日本の大学との関係は(中国の大学などと比べると)弱い。その結果、日本に留学するインド人の数は1600名前後で、中国からの留学生数(約11万人)に比べると約100分の1レベルという驚くべく少人数にとどまっている。

インド人材は欧米のトップ企業や大学で活躍している。例えば、グーグル、マイクロソフト、ペプシコ、アドビシステムズ、マスターカードなどのトップを務めている。このように国際性とリーダーシップに優れたインド人材と日本の将来を担う若者の交流促進に寄与するのがこの事業の目指すところである。

○プログラムの概要

今回の事業では、インドが最も得意とする分野であるITC(情報通信分野)を専門とする若手研究者を中心に政府行政官を含めた30名を招聘。21日(月)には東京大学と東京工業大学を訪問。東大ではコンピューターサ



日印大学交流会後の記念写真



JSTサイエンスプラザで開催された日印大学交流会



報告会終了後にインドレストランで歓送会

理研革新知能統合センターでインド人研究者と議論

結論として、今回の研究者・行政官の招聘によって、日印大学間の相互理解は大きい深まったと感じられたが、今後とも同様の活動を継続・拡大することの必要性が実感された。

○活動の継続・拡大へ

報告会ではインド側参加者からは、(1)「さくらサイエンスプラン」の有効性、(2)日印大学交流の必要性、(3)日本の大学の教育体制、施設や最先端研究体制についての評価などに加えて、(4)日印共同研究の現場においては「もはや日本語の壁は存在しない」という発言が出た。また、インドで日本の大学の知名度を上げるためにも、G I A N (世界の一流機関から招へいする研究者によりインドの高等教育機関で1、2週間、現地学生、若手研究者を指導するインド政府の教育プログラム)などの活用も説明された。

報告会が開催された。

報告会ではインド側参加者からは、(1)「さくらサイエンスプラン」の有効性、(2)日印大学交流の必要性、(3)日本の大学の教育体制、施設や最先端研究体制についての評価などに加えて、(4)日印共同研究の現場においては「もはや日本語の壁は存在しない」という発言が出た。また、インドで日本の大学の知名度を上げるためにも、G I A N (世界の一流機関から招へいする研究者によりインドの高等教育機関で1、2週間、現地学生、若手研究者を指導するインド政府の教育プログラム)などの活用も説明された。

25日(金)午前には、一行は、電子顕微鏡などのトップメーカーである日本電子(JOEL)を訪ね、最新の透過型や走査型の電子顕微鏡や磁気共鳴装置などを見学し、日本企業の最先端技術の開発現場を体験した。同日午後には、今回のプログラムの最終イベントとして、JSTにおいて元駐インド日本国大使2名、文科省、外務省、在日インド商工会の関係者に加えてインド工科大学(IIT)日本同窓会会長なども出席して、今回のプログラムに関する体験報告会が開催された。

○日本企業の最先端技術を体験

24日(木)、一行は日本橋にある理研(革新知能統合センター)を訪ね、AIに関する最先端の研究体制について説明を受け、続いて、理研に所属するインド人研究者からのAI研究に関する説明が行われた。今回の訪日団にはICTの研究者が多く含まれており、熱のこもる質疑がなされ、インド側参加者の満足度は非常に高いものがあつた。

○理研の革新知能統合センター

インド側からは、インド人が日本の大学に留学するためのハードルとして、日本語の壁(学部レベル)、文化・食事習慣などの壁に加えて、卒業後の就職の問題などが指摘された。日本の企業のおくは外国人社員に高い日本語能力を要求するケースが多いのである。また、インドにおいて日本の大学や奨学金制度などについての情報があまりに少ないことが指摘された。一方で、日本の大学でも英語で履修できるコースが増えていることや、すでにインドの大学と広く交流を進めている大学が存在することなどが確認された。

○日印大学交流会

今回のプログラムの特徴の1つは、23日(水)、JSTにおいて日本の大学、高専など26団体(大学、高専、企業など)、45名を集めて、今回招聘したインド大学関係者(19名)、政府関係者(11名)と交流してもらったことだ。インド側からは19人(19校)、日本側からは16人(14校)の合計35名が日印それぞれ大学の専攻分野と国際交流の現状、日印交流の可能性等について英語でプレゼンテーションを行った。会場には多くの関係者が集まり、熱のこもる質疑がなされた。午後は産業技術総合研究所(AIST)を訪ね、T I A (Tsukuba Innovation Area for Nanotechnology)、バイオメディカル研究所を見学した。サイエンススクエアでは、癒し系ロボットの「パロ」に人気が集まった。

22日(火)午前は筑波大学を訪ね、サイバニクス、ロボティクスの最先端研究、また藻類からの原油製造の研究について話を聞き、熱のこもった質疑がなされた。午後は産業技術総合研究所(AIST)を訪ね、T I A (Tsukuba Innovation Area for Nanotechnology)、バイオメディカル研究所を見学した。サイエンススクエアでは、癒し系ロボットの「パロ」に人気が集まった。

意見交換をした。